方及愛媛縣下舊松山藩元卒
ヽ貸下金据置並返納年月更
正ノ件
一十七年度士族勧業資本金乙　六
部補填方ノ件　共二
一石川縣下北陸銀行ノ倒産セシ
ンドスルヲ保助シ併セテ士
族ノ損害ヲ救ハントスルニ
當リ勧業資本金不足ニ付一
時國庫ヨリ繰替支出ノ件

共同運輸會社株金醵出金貸渡ノ儀ニ付伺

共同運輸會社株金醵出金儀別紙之通リ
願出候ニ付其筋調査ノ趣左之通リ
先ヲ以テ
當ニ一方ニ於テ觀察ヲ下ケ一万円金額
助百六拾萬円ニ當ル同社ハ憲法製造ヲ
下ケ一万円ニ成リシ百四拾七萬余ニ加キ
モ総テ製造ノ船舶ハ株金ニ充テシ次第ニテ又
一般株主ハ萬金ニ付キ金額二万四拾萬円ニ成
ニ當ル金額ヲ減ス可キ
海運運輸會社ハ東京、越中両風帆船會社ヲ加
ヘセハ株金四拾二万九千百金円（船價ハ金額不詳ノ者ハ價額ヲ如ク）ヲ加ヘ金ノ現

金百拾三万七千五百余円ノ公債ヲ首トシテ船舶ヲ新造シ又ハ購入ヨリ
右ニ随伴セル諸般ノ経費并ニ各地支店及ヒ役所等ノ如キニ
至リテハ更ニ全資本金額ヲ募集セサルニモ拘ハラス全資本
額ニ対スル営業ヲ準備シナサヽルヘカラス其他創業以
来今日ニ至ル航路ノ修繕改造等営業上一切ノ諸費
ヲ支辨セサルヘカラサル儀ナルモ其後ルヽニ一方ニ営業運輸上ニ於
従テ内ニハ創業ノ際ヨリ引続キ創業セシモ当時未タ営業上
適応ノ航路ニ乏シキヨリ営業続キ購入スル新造セシ船
舶モ寡カラス然ルニ政府ヨリ下附相成リシ航路トモ保セテ四拾
艘ノ多キニ至ルモ下付航路ノ余外ニ於テ新造セシモノハ殊ニ
テ時勢期ヨリ延着ヲ致ク一定ノ運輸ノ用ニ供スルニ至ラスシテ多
クハ本年八月以降ニ於テ竣工ナラス尚未タ外国ヨリ回着セス
成ルモ成之ヲ以テ次第ニシテ専ラ運輸ニ供用セシハ

僅ニ未タ年間ヲ過キサレハ随テ営業上ニ於テモ之ニ準
シ加ルニ近来運賃低落シ為ニ収支計算相償
ハ困ナリシ併タカル儀ニシテ既ニ前年ヨリ於テモ払込済株
金ニ対スル利子配当ヲ除シ政府株金ニ対スル納額ハ会社
ニ於テ数額ニ依リ多額程ノ次第ニシテ新ニ詳偉
業創始ニ係ル莫大ノ資費ヲ要セシニ之ニ反シテ営業ノ日
尚浅クシテ収支計算不相償困難ハ到底免レサル所ニシテ事
実相違ヲ来シ此一般株主ニ対シ利子配当ノ怠ル中ハ
畢竟旧進加入セシ株主ハ勿論ニテ他一般株主ノ気ヲモ忽
チ沮喪シ大ニ将来ノ事業ニ影響ヲ及ホスハ必然ノ勢ニ
シテ為メ株ニ不拘ノ衰退ニ沈淪スルカ如キ不幸ノ結果
ヲ醸出スルニ至テハ其ニ痛歎ニ堪ヘサル次第ニシテ可然様
特殊ノ格ヲ以テ御詮議ノ上本年ヨリ向三年間人民所有

株金高ノ割ニ八年八朱ノ利子酬高金別紙ニ記載ノ割合ニテ貸與ヲ願ヒ出ル社債願ニ為シ閣議ニ成ル様致度尤還納方法ハ全社業慎次整備シ定期ニ明治九年第三種積立金ヲ為シ得ル時ニ至ルノ期ニ之ヲ漸次償還セシムル見込ニテ保証連帯ニ事実ヲ詳ニ上申ス急ニ付テハ允裁ヲ仰キ度別紙願書ヲ添ヘ此段御伺ヒ也

明治十七年十二月九日　農商務卿伯爵松方正義

太政大臣公爵三條實美殿

伺ノ趣ハ本年分金拾六万圓貸下ノ儀特別ヲ以テ聞届ケ其他条件ハ未ダ業ノ目途ヲ確立シ適当ノ方法等更ニ見込相立申出ヘシ

明治十八年二月十七日

明治十七年分十九年ニ至ル共同運輸会社
株金ニ対スル配當金仕譯

明治十七年十二月
配當金拾六万円也ヲ以テ株ハ拾ハ株ハ洋五厘
但年八分ノ割
仝十八年十二月
配當金拾六万八千三百四拾六円也ヲ以テ株ハ拾ハ株ハ洋七厘
但年八分ノ割
仝十九年十二月
配當金拾六万七千九百四拾六円也ヲ以テ株ハ拾ハ株ハ洋七厘
但年八分ノ割

株主総会ニ於テ奉願ノ書付
郵船満運ノ業ニ於テハ尚初ヨリ政府ノ厚ク
保護セラルヽ事ニシテ甚進歩ヤ著キ者
ナリト雖モ又契害ヲ伴ヲ生ジ商売上ニ
強ク上ニサカラサル実係ヲ来タシタルハ六
年来最モ甚ク世上輩ヲ痛歎スルニ
至レリ然レトモ社契ヤ服者ノ勢力ヲ以テ抵
抗スルニ非レハ之ヲ矯正スルニ由ナク徒ニ時
機ノ到ルヲ待チシニ我政府ハ疾ニ既ニ
目察セラルヽ所アリテ一昨明治十六年中
国ニハ特別ナル官令書ヲ発シ我等同
運輸等社ノ設立ヲ保護サレシヲ以テ

農商務省

當ヲ復興ニ資シ編セルモノハ勿論自己新
案能者トナリ国年十月郡小ニ集会シ
テ定款并創立規約ヲ議定シ閣下ノ
認可ヲ蒙リ四方ニ散シテ有志者ヲ募
リシニ三百四拾余円ノ巨額モ僅ニ一週
年以内ニ於テ株主満員ヲ告ケタリ之レ
固ヨリ政府カ助力ヲ与ヘ給フ円ヲ資金ニ
加入セラルヽ特殊ノ奨勧アルニ由ルト云
ヘモ又以テ奨ニ資ムノ多動ニ出ルモノ蓋シ力アリ
ト謂フヘシ而肯偖高吉撰授ヲ蒙リ本社ニ長ノ
任ヲ辱フシ創立ノ事業ニ尚リ各地奔走人ノ通信
遠爾荷モノ希望ムル所ニ依リ熟ク既時ノ情況ヲ

察スルニ尊常ノ恢序ヲ云ヘハ先ツ資金ノ部分ヲ募リ
之ヲ言ヒ所シテ南奥
金額ノ豪業トスヘケレモ本社ノ創立ヤ国ト共ニ的ハ
当時ノ奨ヲ矯正シ廣ク殖産貿易ノ便ヲ開ス
ニアリテ潟沢加入ノ株主ハ新ク彼ノ奨ニ寄メラル
ヽカ又ハ運搬ノ上便ニ若ムモノ多ク一日モ早ク其国
石ヲ警セント熱心希望シ之ヲ加盟スレハ明日ニハ
紙地方ニ船ノ航風ヲ促スカ如キ勢ナレハ若シ後
漫ノ恢序ヲ遂ノ時ハ一般人情ノ弛ク為ニ胥弛シ一
止奮発セシ人氣モ為メニ萎靡シテ後タ誘発スル能
ハサルノ憾ニ陥ラシトスル畏レアリ是ヲ以テ
本年二出入スル新汽船ヲ購入セ
レト欲スレトモ恢好ノモノヲ得ス係ヲ

寧ロ歐洲ニ於テ存望ノモノヲ購求
スルニ如カスト高橋義ノ際適マ政府ヨリ
下付セラルヘキ海軍附屬ノ大汽罐
武隻ハ製造ニ付ハ宜シク注文方法
殷徳理ノ家ヲ勸ムルハ外事ニ
シ歐洲ニテ購入セント一決シ尚時株
主募集ノ初歩ニテ未タ集金ノ情
合ナラサレハ一時日本銀行ノ融通
得テ之ニ充シトノ意旨ニテ改進党
六年一月郵船ニ搭シ英国ニ着スル
ヤ直チニ費額ノ多寡ヲ尋ネシニ
費額ノ数ハ二十餘隻ニモシリ故ニ
直様四方ニ奔走シテ之レヲ買搭スルニ御地方ノ

高価荷物ノ性質等ノ異ルヨリ我カ沿海ノ運輸ニ
適当スルモノ更ニナク例クシテ日本商船
ナル者三隻ヲ得テ新造ニ一隻ハ新製
ニ為セリ然ルニ本社ニ於テハ株主ノ募集期
限ハ運ブニ間ニ合ハス而シテ船ノ必要ヲ感シ速モ
尋常ノ手段ヲ以テ為スヘカラサルヲ論シ遂ニ
外債ヲ起シテ汽船ヲ大小数隻ノ注文ヲ托シ来
頗シ甚タ許ヲ得テ
レリ偶テ直チニ金融ヲ謀リ之ヲ官庁ノ汽船
ヲ注文セリ月ト順次ニ回為スルモノ即チ它
ナリ是ハ我政府カ民間ノ実況ヲ察セサルハ
ニアラスシテ安ンソ斯ノ如キ非常ノ恢復ヲ
運フヲ得ンヤ然リ而テ営業ノ一方ヲ有

レハ其臺灣タル汽船ノ様迷惑ニ至ル迄ノ
ヨキ運ヒナレハ其國為ニ先チ豫メ之レニ対
抗セシテ必要ナル倉庫或ハ船舶ノ備
ヘナカルヘカラス又未タ固ヨリ情所ニモ代
理店ノ契約ヲ結ヒ未タ社員ノ出張ヲ必要ト
セサル所ニモ支店出張所ヲ設カサルヲ得サ
ルニ至リタレハ是業ノ割合ニ拘ラス諸般ノ
計画ハ全資本家部ニ對スル準備ヲ為サヽ
ルヲ得サルノ形状トナリ加ヘ運賃ノ低落ヤ
徳恵ノ如キ出テ今日ニテハ或ヒト年ノ四
分ノ一ニ過キサルモノアリ故ニ予ハ此ノ契ハ
業已ニ一掃シテ或ハ鄙ヲ貶ヒ之ノ怨念
ヲ惜長セシムルニ如シ仮ヲ惟ルニ設

府ノ當テ殖産興業ノ為メニ憂慮セ
ラルヽ所ノモノハ此ニ至テ既ニ十二分
ニ陸都シ得タリト信ス然リ而テ特ノ本社
ノ實際ニ於テハ其基礎等合ノ以テ所
容ニ入クラサルモノアリ其ハ他ニアラス
株主ノ醵金ニ對スル利益ノ配當乏ナ
リ昨年ニ於テハ資本ノ募集高高ハ多
カラサレハ種々ノ差繰ヲ以テ各株主ニ
對シ相當ノ利益ヲ配當シ得タレトモ本年
ニ至テハ諸般ノ失費ハ節減ノ上ニモ
節減ヲ加フルモ計画ニ從テ其費ヘモ
増加セサルヲ得サルモノアレハ復タ前
年ヲ以テ比較スヘキニアラス然ルニ

當業ノ收益タルヤ新製ノ大小汽船ハ堅ク其回着ヲ遲緩シ

船名	回着月日	初航海ノ月日
山城丸	七月九日	八月七日
近江丸	九月四日	十月十四日
薩摩丸	十月廿五日	十一月廿日
相模丸	十月十三日	十月廿七日
紀伊丸	九月廿九日	十月十四日
陸奥丸	九月廿一日	十月十四日
出雲丸	十月十一日	十月十七日
長門丸	未着	
肥後丸	未着	

美濃丸	未着	
播磨丸	未着	

斯ノ如クナレハ今日幸航海船ノ數ヲ挙レハ稍完全ナル者ノ如シト雖ト其實ハ新着ノ船ハ必ス入渠ノ上船底塗換又ハ多少ノ修繕等ニ日子ヲ費シ之ヲ實地ニ使用スルハ終ノ日數ニテ在来ノ數ノ汽船ヲ以テ一大會社ヲ經營シタルモノナレハ如何ニ節儉スルモ得ル所豆ス所ヲ償フ能ハス本年度ニ於テハ到底株主ニ配當スヘキノ利益ヲ得ヘカラス殊ニ集合ノ資金ニ大ニ增加スレハ之レニ配當シ得ヘキ金額ハ僅少ナラス區々ノ義理ヲ以テ一時ヲ凌ントスルモ得ヘカラス是レ當業ノ罪ニアラサル也創業ノ際不得止

ノ情勢ナリ或ハ云ハヽ元ハ何等ノ営業ヲ向ハス創業三五年間ハ利益ヲ得シテ固ヨリ雖キハ尋常ノ事ナレハ今年ニ於テ利益ノ配当ナキモ何ソ株主ニ於テ深キ苦情ノアルヘキヤト誠ニ当公平ノ言ナリト云フヘシ然レトモ事実ヲ解セサル傍観者ノ理論ニシテ其實際ニ於テ行ハレサルヲ如何セン何トナレハ本社ノ株主ハ六千有餘人アリテ其内自ラ舊テ株主トナハ者ト自己ハ直接ノ痛痒ナキモ我カ海運ノ仲間ヲ賛助スルモノトノ加盟固ヨリ多シト雖モ乞若ノ有志者ニ奨勵サシ又ハ人氣ノ傾ク雷同シ入社スレハ初當ノ利益ハ確實ニ領收シ得ラルヘシト信シテ加盟セルモノ前両者ニ比スレハ或ハ多キニ居ラン殊ニ間々所ニ依レハ

一家生計ノ資本ニ充ル公債証書ヲ賣却シテ本社ニ加入セシモノ亦少カラスト是若株主ニ至テハ唯收利ヲ以テ目的トスレハ若シ一年ニテモ利益ノ配當ヲ得サルトキハ其失望思レテ如何ヲヤ遂ニハ本社ノ株式ヲ厭フノ怨ヲ醸シ多少ノ損失モ問ハスシテ賣却スルニ至ラシメ制スヘカラサルノ勢ナリ万一ニモ斯ル不幸ノ起ル件ハ忽チ本社ノ信用ヲ墜シ政府ノ厚キ奨励モ水泡ニ属シ適々時機ヲ得テ舊然蹶起シタル世上ノ人氣モ一朝沮喪シテ復タ挽回スヘカラサルニ至ラン實ニ痛心ニ堪ヘサル也乞ヲ以テ今日敢テ閣下ニ哀訴悃願スル所アリ本年ヨリ向フ三ヶ年

間人民所有株高ニ對シ年八朱ニ當ル利子
配當金ヲ貸與セラレシヲ但其返納ハ営業
順次整備シ定款ニ明記スル第三種ノ積立
金ヲ為シ得ル場合ニ至ラハ之レヲ以テ必ス返納
ノ数ニ充ツヘシ之決シテ本社一己ノ為メナラ
ス本社ノ創立ハ政府ノ命令ヲ以テ成リ本社
ノ営業ハ政府ノ保護ヲ以テ立ツヲハ世上ノ
普ク知ル所ナレハ本社ノ盛衰ハ其関係スル
所浅少ナラサルヲ以テ十分ノ奮勉ハ閣下前後ノ
情勢ヲ洞見セラレ特殊ノ恩典ヲ蒙ヶ本体
ヲ株納セラレンヲ伏テ奉懇願候也

共同運輸會社ニ長

明治十七年十一月　伊藤雋吉

農商務卿松方正義殿

農商務省伺ニ対シ共同運輸會社株主配當金貸與ノ件特別ノ以テ御許可相成候ニ付金額支出ノ見込相立具状可致旨達之趣敬承仕候試ニ今之ヲ繰替貸ト為サントセハ其返納ノ期年度確定セサルヲ以テ財政ノ不整理不過之候ニ付寧ロ之ヲ本年度ノ歳出ト為シ一旦拂切リ他日還納ニ及候時ハ一般貸下金ノ返納ト同一ノ振合ヲ以テ取扱候方可然ト存シ乃チ常用在金ノ内ヲ以テ支出方

取計可申候 此段及上申置候也

明治十八年二月廿四日 大藏卿伯爵松方正義

太政大臣公爵三條實美殿

秘 濟 要

乙第三九〇号

明治十八年二月六日 内閣書記官

内閣書記官長

大臣

農商務省伺 共同運輸會社株主配當金貸與之事

右回議ニ付ス（特別ノ儀ヲ以テ本年分貸下ノ旨閣議決定ス）

別紙

参議

大木 伊藤 黒田 山田 大山 西郷 川村 松方 佐野 樺山 品川 井上 榎本 後藤

甲三九〇号ノ乙

十八年二月六日 内閣書記官

内閣書記官長

高秋省伺共同運輸會社
金貸與之事
議ニ付ス（特ニ別紙ヲ以テ本年分貸下ノ旨指揮令達）

議

大木	伊藤
山縣	西郷
川村	井上
山田	松方
大山	福岡
佐木	

別紙意見書添付ノ上ニ
是ニ捺印不致候事

十八

秘書要

明治十七年十二月

内閣書記官長　上中　棄

第一局書記官

別紙若高務省同共同運輸會社株主配當金貸
与ノ件ハ該社ノ事業未ダ豫期セル所ニ至ラス収支計算
相償ハサルニ依リ一般ノ株主ニ対シ利益ノ配當モ為ス能
ハス本年ヲ以テ三ヶ年間株主ニ配當スヘキ金額別
紙ノ通貸与相求度ト雖モ有之抑該社ノ義ハ政府ヨリ
既ニ巨額ノ株金ヲ為加ヘタルノ外國ノ私債ニ対シテハ
政府ノ保證ニ立レス客歳ニ在テハ政府ノ株金ニ対
スル利子ハ免除セラルヽ等其保護ヲ蒙ル実ニ鮮少ナラス
況ンヤ他ノ株主ニ配當金ノ為メ貸下ヲ請フハ都

合ノ七額ニシテ容易ニ内務許諾和蘭ト交渉ス
ベキ性質ニ非ス八物来ノ事業ハ新設ヲ及ホシ経営
嘉運ニモ傾クヘキ景況ニ相関及ボシ併ヲ立ノ如ク今日
三ヶ年間ノ配当金減下ノ許可アルニ於テハ恩典ニ抑ヒ和
ヲ営業上氣復シヲ生スル等ノ契ヲ来シ甚タ以テ不可
ナリトス各会社ニ巨額ノ金額ニシテ歳計上ノ負担ヲ不
久義台ノ際本年分金拾万円ノ内特別許可
右武式左案ヲ具シ仰高裁ス也

御指令案

何ノ趣ハ本年分金拾万円限下ノ儀特別ヲ以テ
内務大臣ノ来営業ノ目途ヲ確立シ適当ノ方法
等更ニ見込相立申ヲ一ニ

明治十八年二月十七日

大蔵省ヘ御達案 別紙

別紙若商務省何共同運輸会社株主配当
金貸与ノ件願書ノ通ハ拾万円ノ金額又
ヲ以テ見込相立ヲ拾万円ノ金額又
ヲ以テ見込相立ヲ拾万円ノ金額又
金日

参照

共同運輸會社株主ヘ純益配当金拝借願ニ對スル意見書

我國從来航海運輸ノイタル曾テ其船舶乏シキ時ニ当リ概ネ便ヲ外國ノ會社ニ憑ミ彼レヲシテ内外運輸ノ利益ヲ攫取セシメ併テ航海ノ権ヲ占有セラレシモノヽ如ク当時謂フ可カラサルノ不便ヲ覺ヘ官民殆ント堪ヘサラントスルニ至リ諸人大ニ憤勵スル所アリテ始メテ郵便汽船會社ヲ設立シ或ハ三菱會社等ノ有レアツテ漸ク航海運輸ノ業ヲ營ムヿヲ得ルト雖ドモ猶ホ創業日浅ク実際外人ニ制セラレ偶マ競爭ヲ試ミルモ彼レハ資本ニ乏シカラス且船

船ノ優等ナル常ニ我ニ先ンスル所トナリ最モ擅横ヲ極ム
是ニ於テ政府モ深ク航海ノ事ニ注意シ特ニ三菱會社ヲ保
護スルニ至ルト雖ドモ猶ホ内地航海ノ事ダモ意ノ如クナラス動
モスレハ外人我ニ對シ競争ヲ試ミル等ノ障碍アルヲ免カレス
当時頗ル困難ノ状況ナリシカ爾来政府ノ保護ニ依リ漸次
其船舶ヲ增加シ随テ航海ノ事業ヲ擴張シ大ニ面目ヲ得
ルニ至リシモ如何セン優存劣滅ノ數自然航海ハ三菱會社
ノ專ハラニスル所トナリ曩ニ世人ノ厭ヒヲ来シ嫌忌日ニ甚タシキ
ニ至レリ是レ其共同運輸會社ヲ設立スルノ起因タリ然リ
而シテ両社立営業ヲ競フヤ其航海術ヲ隆盛ニ至ラシ
ン内外運輸ニ便ヲ得ルノ場合ニ於テハ実ニ然リ然レトモ此両
社立存ノ1タル之ヲ前者ニ徴スルモ到底両ツナカラ倒レサ
レハ大ニ其資本ヲ傷ルノ患アルヲ免カレス故ニ今ニシテ之ヲ
放任シ其競争スルノ日久シキニ彌レハ両社倍々相敵視シ
互ニ其倒レヽヲ待ツノミ
若シ夫レ政府ノ関渉セサルモノニシテ各自営業ニ競争ス
ルハ総テ民間ノ常態ニシテ即チ文明日進ノ実相ト謂フ可
ク此ノ如キハ唯宜シク時勢ニ委ス可シト雖ドモ抑両社ノ如
キ特ニ政府カ保護スル所以ハ孚竟我　帝國ノ体面ヲ
保チ倍々航海事業ヲ擴張シ廣ク民ノ福利ヲ增進セント

スルニアレハ固ヨリ尋常営業者ノ事情ト同シカラス然レ
ハ則チ徒ラニ抵抗ヲ事トシ損益ヲ省ミス恰カモ曩ニ外人
ト競争シタルカ如キ情態ヲ現出スルニ至テハ啻ニ政府カ
保護ヲ加フルノ要旨ヲ失フノミナラス之カ為メニ他ノ同営
業者就中帆前船并該造船ヲ以テ専業トスル者ニ在
テハ非常ノ影響ヲ被ムリ其間殆ント停業ノ姿トナリ自
然各々船体ノ改良ヲ怠タリ両社亦相次テ極フ可カラサ
ルノ困迫ニ至リ彼ノ外人ヲシテ再ヒ其機ニ乗セシムルヿアラ
シニハ後来ノ苦心ト消費ハ忽チ水泡ニ帰シ我國ノ経済上
ハ勿論諸人営業ノ進路ニ対シ其妨害ヲ加フルヿ鮮少ナ
ラサルヤ敢テ贅辯ヲ俟タス
然リト雖モ業已ニ両社並立セシ今日ノ場合ニ在テハ假
令政府ノ注意スル所アルモ到底競争ノ事トスルノ情態
ハ制止シ難ク実ニ弊害百端枚挙ス可カラサル勢ヒナルニ由
リ今之ヲ一掃シ速大ノ目的ヲ立テ漸次航海ノ途ヲ擴張ス
ルノ措置無ル可カラス依テ此際既社ノ性質ヲ解キ之ヲ官
有ト為シ後前該社ニ対シ政府ヨリ保護ニ係ル金額又ハ
貸付ノ船舶ニ至ル迄悉皆引揚ケ而シテ其株主ハ相当利
付ノ公債証書ヲ與フル如キノ方法ヲ以テ各々損失無ラシン又
三菱會社ニ於ルモ右同様ニ處分シ船舶及諸物件等総

ヲ引揚ケ或ハ買上ケ併テ官主ノ一社ヲ設立シ而シテ其組織ノ如キハ大凡日本銀行ノ体裁ニ準ヒ其基礎ヲ鞏固ニシ苟モ彼レカ如キ弊無ラシメハ一ハ以テ我國經濟上ノ得策ニ出テ傍ラ諸人ノ營業ヲ妨ケサルニ至リ且後来更レ是レノ煩ヒヲモ省キ長ク官民ノ便益ヲ見ル可シ

以上其利害ト處分方法ノ概略ヲ陳述スル所ナリ而シテ尚ホ熟々按スルニ今般ニ此願旨ヲ採用セラルヽアラン乎該社ニ於テハ惣株主ヲ瞞着スルノ嫌アリ殊ニ國費ハ日ニ月ニ多端ヲ告ケ加ルニ目下海外ニ對シ將ニ事アラントスルノ秋ナリ焉ンソ此願旨ヲ容ルヽノ餘裕アランヤ宜シク之ヲ件クル外無ル可シ然ルニ之ヲ件クルニ於テハ該社ハ依然保續シ得可カラサルモノヽ如シ依テ彼是ノ事情ヲ斟酌スルニ結局前陳ノ通決議斷行セラルヽヨリ他ニ良策無之義ト思考ス尤モ其該立ノ方法及両社處分ノ事ニ至テハ先ツ本議ヲ決定セラルヽヲ俟テ猶ホ細陳スル所アラントス茲ニ卑見ヲ具シ以テ參覧ニ供フ謹言

明治十七年十二月

子爵土方久元㊞

農甲三九〇号乙ノ屬

明治十八年二月廿五日　内閣書記官

大臣

内閣書記官長

大蔵省上申共同運輸會社株主配當金貸與ノ金額支出方之事

秘　濟　常

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

明治六年二月廿四日　第一号

内務卿記官長　中島信行

上申案

別紙大蔵省上申共四冊録分は相違無
當金穀出納之件伺之
覽ニ付

太政官

伺

共四冊録分は相違無之旨社寺領
所管省伺之通録分
金拾六万円窮民救恤
金穀出納之件

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

用在金之如另五出ニ答陸奥伯爵ヘ通牒ス

宮内大臣

院長宮殿下

明治十八年三月二日

内閣書記官

参照

有限共同運輸會社定款中

第二章　資本金

第九條　當會社ノ資本金ハ六百万圓トシ之レヲ拾貳万株ニ分チ一株ヲ五拾圓ト定ムヘシ然レモ株主衆議ノ上政府ノ許可ヲ得ルニ於テハ之ヲ増加スルヿアルヘシ但シ資本金ノ内貳百六拾万圓ハ政府ニ於テ引受フレ他ノ三百四拾万圓ハ一般人民ヨリ募集スルモノトス

第十條　資本金六百万圓ノ内五百弐拾万圓ハ汽船六拾万圓ハ帆船弐拾万圓ハ營業資本ニ供スヘシ

但本條ノ割合ハ時機ニヨリ政府ノ許可ヲ得テ増加スルヿアルヘシ

第十一條　當會社ノ株金ハ株式申込ノ時（三十日間）弐割ヲ拂入レ餘ハ營業ノ都合ニヨリ會社ヨリ報告ノ時ニ幾回ニモ拂入ルヽモノトス此募集ノ報告ハ少クモ五十日前ニ於テスヘシ

但總額拂入ノ期限ハ来ル明治十八年十二月三十一日ヲ限リトス

第九章　計算

第五十五條　當會社ノ損益計算ハ毎年一月七月ノ両度ト為シ株主總會ニ報告シ利益金ノ配當ヲ為スヿヲ可シ

第五十六條　船体保險準備トシテ一ヶ年ニ付各船代價ノ百分ノ七ヲ收入金ノ内ヨリ積立（汽船帆船トモ）之ヲ第一種積金ト称スヘシ

但シ船舶危險ニ遭遇シタル破損ノ修繕費本船原價百分ノ三以上ニ當ル時ハ此積金ヨリ償却スルモノトス

第五十七條　汽船ハ汽罐帆船ハ銅板張替ノ準備及ヒ通常大修繕ノ準備トシテ一ヶ年ニ付各船總代價ノ百分ノ五ヲ收入金ノ内ヨリ積立之ヲ第二種ノ積金ト称スヘシ

第五十八條　營業上ノ都合ニヨリ多分ノ利益アルトキハ株主ノ衆議ニヨリ第三種ノ積金ヲ為スヿアルヘシ

第五十九條　當會社收入金總額ヨリ一切ノ費用及ヒ尋常船体ノ修繕費各種ノ積立金ヲ除キ殘金ヲ以テ純益ト為シ其内ヨリ役員ノ賞與金ヲ引去リ餘ヲ株高ニ割合配當スヘシ

共同運輸會社株金中政府ニ於テ引受ケ金額拂入ヶ多左ノ通

一金貳百六拾万圓　政府引受高

内

金百四拾七万圓　既ニ拂込

残　金百拾三万圓　十八年度ニ拂込ヲ

軍船甲第百六

共同運輸會社、政府加入株金支出

共同運輸會社ヨリ政府加入株金支出ニ
之義伺

共同運輸會社ヨリ政府加入株金支出ニ
義ニ付別命ニ之通願出ニ付取調ニ及處該
金額ニ之義八十六年中大藏卿、協議之末
十八年度ヨリ向三ヶ年ニ割賦交付スベキ筈ニ付
之處既ニ交付ニ之殘額ヲ本年年六月中迄ニ
悉皆下付相成度トノ旨趣ニ付之ニ抑該
金額ノ一時交付ヲ請願スルヤ曩ニ同社長
英國滞在中歐洲ニ於テ船價非常低廉
之機ニ際セシヲ以テ此好機ニ乘シ船舶ヲ購
送スルヤ八頗ル低廉ナルモノヲ得ラルヽ通報ヲ